

Title	<書評>吉野正敏著 『モンスーンアジアの水資源』 古今書院, 1973, 259p.
Author(s)	中島, 暢太郎
Citation	東南アジア研究 (1974), 11(4): 561-562
Issue Date	1974-03
URL	http://hdl.handle.net/2433/55749
Right	
Type	Journal Article
Textversion	publisher

明しているのであるから、技術的条件が重要にみえるのは当然である。もし、分析の順序を逆転し、たとえば、「国の差」をあらわすものとして賃金と利子率との比率を用いて最初の回帰分析を行ない、次いで、制度的条件、人的条件、技術的条件に及ぶならば、結論はおそらく完全に逆転するであろう。

したがって、「結論」のところで著者が提出しているような技術の支配を過度に重視した勧告をただちに受け入れるわけにはいかない。たとえば、著者は、発展途上国に技術を移す場合、「設備を維持運転するための人員、組織、職位構成、そこでの作業配分は完全に技術的条件だけによって決定されるべきである」といっているが、これは上記の誤った推論に基づいた勧告であってそれがどれだけ妥当かについては今のところなんともいえない。

だいたい、資本、労働等との間の相対価格に大きな格差のある工業国と発展途上国の間で技術の「水平移行」をはかるといふ発想そのものが非社会科学的なのである。しかも、そ

のような発想に基づいて選ばれた火力発電所というきわめて特殊な産業においても見出される労働装備率格差を誤って技術的要因に帰属させてしまったのでは、社会科学としては立つ瀬がない。

もっとも、火力発電所が特殊なケースであることは事実だとしても、このような「技術の水平移行」も経済発展のために必要な技術移転の一部にはちがいない。そのような分野では、著者の調査が壮大かつ斬新であり、その結果が貴重なものであることは疑いない。このような貴重な情報が有効に利用されるよう、近く刊行予定の英文版や将来刊行されるべき邦文第2版では、少なくともすべての平均値を提示し、さらにできれば、付表において、発電所別に、すべての調査結果を数値で示してほしいものである。そうすれば、本書はその価値を倍増し、産業社会学における記念碑的存在としての地位を確立するにちがいない。

図書紹介

吉野正敏『モンスーンアジアの水資源』
1973, 古今書院, 259pp.

さきと同じ著者らによって1971年に英文で『モンスーンアジアの水収支』という図書が発刊され、本誌9巻4号に久馬氏による紹介もなされたが、これは吉野を代表者として1971年度に行なわれた協同研究の成果であり、前著の続編ともいふべきものである。水収支と水資源とはどこが異なるのであろうか。著者は「水資源として利用できる水は、とにかく水収支からみれば水過剰量である」と表現している。しかし本書は表題から想像されるような経済学的な面

はあまり見られず、前著の問題点についてさらに深く考察したといえよう。さらにいうならば、現状では水収支と水資源の区別などいっている段階でなく、東南アジアの水について気候学的にわかっていないことがあまりにも多いので、研究グループの総力をあげてその解明に努力した成果といえよう。

内容は16編の論文を次の6部において収めたものである。

- I 序説
- II モンスーンアジアにおける降水と蒸発
- III モンスーンアジアにおける夏の雨季の線観気候学
- IV 日本の梅雨と冬の雪
- V 東南アジアと東アジアにおける降水量と気候の変動
- VI モンスーンアジアの季節区分と地域区分

吉野は蒸発よりも降水の研究が重要であり、そのためには(1)なるべく多数の地点による正確な降水量分布図を作ること、(2)年々の変動率を詳しく求めること、(3)ITCZとの関連、あるいは季節変動の機構を明らかにすること(4)大気循環との関連を明らかにすること、(5)気候変動論の立場から永年の変化傾向・周期などを明らかにすることが重要であると指摘しており、この線に沿って研究グループのメンバーが意欲的な研究成果を発表している。

最近の成層圏気象学、熱帯気象力学の発展や気象衛星資料の統計的利用が可能になったことがこれらの研究論文を目新しいものとするのに役立っている。

東南アジアの水資源という重要な問題に、はじめてグループ研究で立ち向かった勇気と努力は高く評価され、この書を土台として多くの後継者が生まれることと思う。しかしはじめにも述べたように農学やその他の分野の人たちに直接利用出来る資料集ではない。

(中島暢太郎・京大防災研)

Merle L. Esmay and Carl W. Hall
(ed.). *Agricultural Mechanization in Developing Countries*. Tokyo: Shin-Norinsha, 1973. 221pp.

発展途上国における農業の機械化の必要性とその効果に関する議論はいろいろとなされている。本書の目的はこれらの議論をくり返すのではなく、1冊の本の中に農業の機械化を主眼においた多くの情報資料を集め、より理にかなった議論を行なうための根拠を提供しようとするものである。

著者兼編集者の Dr. Esmay はミシガン州立大学の農業工学科の教授であり、Dr. Hall は同学科の前学科主任教授、現在ワシントン州立大学工学部長である。ほかに8人の同大学のスタッフが本書を執筆しているが、かれらはすべて外国における農業機械化についての実地活動の経験を持っている。これらの経験の分野は教育・研究とその応用、および行政にまでおよぶと同時に、政府から企業にまで至っており、また世界の多くの地域にまたがっている。

発展途上国の農業開発に関しては経済学者、農学者、社会学者、政治学者などから多くの意見が出ている。これらの意見は往々農業の機械化にも言及しているが、これは農業機械化が発展途上国の国家建設には欠くことができないからである。しかし発展途上国の農業機械化に関する1冊にまとまった参考書は残念ながら今までは見出されない。この問題を解決しようとするのが本書の目的である。本書の大部分は専門誌、セミナー、大学での講義の中で議論されたものである。さらに特記されるべきことは、本書の多くの部分が世界の数カ国において過去に実施された農業機械化計画の実際的資料にもとづいて書かれている点である。

本書はつぎの8章によって構成されている。

- 第1章 農業機械化の原則
- 第2章 赤道アフリカにおける農業機械化
- 第3章 アジアにおける農業機械化
- 第4章 ラテンアメリカにおける農業機械化
- 第5章 トラクタおよび作業機の所有形態
- 第6章 発展途上国における穀類の乾燥、貯蔵および加工調製
- 第7章 発展途上国におけるかんがい
- 第8章 発展途上国における農業機械化のための教育と実地訓練

本書の著者らによると、農業機械化は人間の手を拡大し労力を削減するためのすべての道具と機械を含むものと定義される。それゆえくわの改良は農業機械化の一過程であり、あるいは農場の水路整備、生産物加工所の電化、また改善設備による生産物の貯蔵などはすべて農業機械化の進歩と考えられるのである。本書の強調点は農業機械化という概念は必ずしも大型トラクタや収穫機械を意味しないということである。とくに人口密度の高い発展途上国に関して大型農業機械化はあてはまらないとしている。本書の特徴は発展途上国における農業機械化の原則について述べるだけでなく、農業機械化と密接な関係を持つ社会経済的部門にまで言及している点である。最後の章では農業機械化の発展に先行あるいは平行して実施されるべき教育および実地訓練の重要性が強調されている。本書は発展途上国の農業機械化に関するはじめての総括として意味を持つものである。(法貴 誠・三重大学)